

乾坤の變と風雅の種

土田龍太郎

名に負ふ歌人の世々にものせる歌論のたぐひ少からず、いづれあたれりやとみに定めがたきはさることなれども、今こころみにかの藤原俊成定家父子の論あけつらひをあらあらけみせむに、古へより云ひ習はせる風躰さまざまあるが中に、俊成卿のことに重くせるは幽玄にほかならで、なにとなく艶にも幽玄にも聞え詞姿こはずがたのほかに景氣添ひたるをよき歌と思へりしがごとし。定家卿はこれにややかはりて有心體を尊びたれども、この有心とは幽玄といとしも異なるにてはあらず。この卿にとりて秀逸とはいかなる歌なりしやらむ、毎月抄の中の左に引くところよりぞおろおろ知るをうべき。

心ふかくたけたかく、たくみことばの外まであまれるやうにて、姿けだかく詞なべつづづけがたきがしかもやすらかにきこゆるやうにておもしろく、かすかなる景趣たちそひて面影ただならず、けしきはさるから心もそぞろかぬ歌にて侍り。

されば俊成と定家の歌論、ひとへに同じとはいふまじけれ、ともに餘情妖艶のおもむきの缺くべからざるを思へるにいたり。

かの芭蕉庵桃青翁、世を旅になせし一期のはてに至れる風雅のさかひの深くはるかなることたとしへなけれども、この翁のおのが内證を筆先にしかとどむることなきままに儼化ありしこそいともあたらしといはでやはあらめ。さればせめては去來抄三冊子など門人のものせる草子のここかしこに遺れる庭訓のかたはしばかり拾ひつつ蕉翁の奥旨をかつがつ窺はむほかすべなきにいたり。

蕉翁の心に慕ひし風雅と俊成定家の歌論を比ぶるに、あひかよおもむきたえてなしとこそはいひがたけれ、かたみに似よれるところとはなかなか見出でがたかるべし。

よるべなき旅路のはてに露と消えぬるまで翁の心にかかりてやまざりしは、いかで乾坤の奥が入り造化の神妙を究めむてふせちなる思ひにほかなかりけり。乾坤歸入といふこと蕉翁風雅の要をなせりといはむも誤たざるべし。さればこの翁

しかも風雅におけるもの造化に隨ひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし。思ふ所月にあらずといふ事なし。

と説きて後、

造化に隨ひ造化に歸るとなり。

と云ひて笈の小文の序をとぢめたり。

ここに造化といひ乾坤といへるは、天地自然にかぎり花鳥風月にかたよせて思ふべからず。人間世俗のうつつのありさまに兼ね及ぶものと見なすべければ、森羅萬象といひかへむともさしたる過とがなかるべし。

土芳赤冊子の内にて、松の事は松に習へ竹の事は竹に習へてふ師の詞を引けれど、この習へといふ言を土芳の釋けるやうおほかた左のごとし。

習へと云は、物に入てその微あらはれ顯あらはれて情感る句となる所也。たとへ物あらはに云出ても、そのものより自然に出る情にあらざれば、物と我と二ツになりて且情誠にたらず。私意のなす作意也云々。

私意を離れよといふが肝要なるにたり。

さはいへど、すでに私意は棄ててぬれど、も、ただ造化に没入せるままにては、夷狄いでき鳥獸てうじうといささかも異なることなければ拙ちつしといはでやはあらむ。たとへ造化に隨ふべしといふとも、これ造化に没入せよとはあらじ。むしろ造化に參入し歸入せむこそまことの風雅者の心おきてたるべけれ。造化にただ没入せるままなる夷狄鳥獸の造化に對むかひ風雅に興らむこと望むべくもあらじ。

乾坤と風雅のあひ關れるさまにつきて、桃青翁かつて談かたりしことありて、土芳これを同じ赤冊の内につばらに引きたれども、これやがて蕉風俳諧の奥旨なりといはむもはばかりなかるべし。ゆめなほざりに見過すまじければ左にさながら掲げではあるべからず。

師の曰、乾坤の變は風雅のたね也といへり。靜なるものは不變の姿也。動るものは變也。時としてとめざればとどまらず。止るといふは見とめ聞とむる也。飛花落葉の散亂るも、その中にして見とめ聞とめざればおさまることなし。その活たる物だに消て跡なし。

ここに見とめ聞とむといへるはそもいかなるわざならむ。いとも神妙にてとみにはえ悟りがたけれども、おほかたのおもむきのみかつがつおし測るに、まことの俳諧者の發句わづか十七字の内に、乾坤のはたらしすらをも刹那ばかりえ止むるくすしき力の宿れるさまを云へるににたり。一時だにも止らぬものにてはあれども、この乾坤の刹那ごとに迫りくる森羅萬象の實相のごときものはたなかるべきにあらず。かかる實相のふと顯れていまだ消えてあとなくなるさきに、たちまち發句もて永く形あるものに定むるが俳諧者の至極の巧みなるべし。このわざいともあえかにてくすしともあやふしともいひつべかるめれど、土芳の右に引けりし師説にただに續けて

又、句作りに師の詞有。物の見へたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし。

と記せり。

それ乾坤なるものただ乾坤のままにてあるほどはまことの乾坤になりおほせたりとはいまだいふべからず。存立と轉變のみにては足らはず、顯現をまちてぞまことの乾坤の位に定まるなる。このことわりまことに玄妙にしてなべての言説もてはさらに説きつくしがたきはいとほいなければど、今かりそめにかたはしばかりを述べむとならば、左のごとくに云ふをうべからむ。

そも乾坤はたえず變らではあるべからず。刹那に變りてやまざる變りめぐとに人の見とめ聞とむるによりて、その刹那ばかりは止るがごとくなりて、かつて顯れざりしまことの姿のおのづと顯るるにてぞある。かく乾坤は俳諧者の入神のいとなみをまちてはじめて顯現安立するなれば、桃青翁の風雅の究まるところにそひて考ふるに、乾坤は俳諧者の觀照洞見によりてぞその本然の相貌を顯すなると云はむも誤りなかるべきなり。

俳諧なるものただ花鳥風月を賞づる數奇人のもてあそびぐさにてはあらず。人事と天地のはざまにありて乾坤の實相を捉へ、造化をしてまことの造化たらしむるが俳諧者なりとせば、この俳諧者ただに諸相を寫すのみにはあらず、げに乾坤の存立開閉の管籥くわんやくをも取れるにほかなければそのいさをしの重く尊きこと譬へむにものなかるべし。

乾坤の變は風雅の種なりとせば變りてやまざる乾坤の刹那ごとにはや風雅のきぎさではあるべからず。この風雅また千變萬化にて盡くることなし。されば造化の内いづこにありとも思ふところ月にあらずといふことなし像花にあらずといふことなしと笈の小文の中に云へるこそさがたきつひのことわりにほかなきなれ。

(令和六年九月二十六日受附)